新回
功序
全本
へ13
3558
4

門 へ13
號 3558
巻 4

早稲田大学図書館 昭34.6.3 購 蔵書

新田功臣

柱石傳初輯巻之四

第七回 強賊亂入驚衆人

當下金吾八は玉垂が。按内によりて土庫へしのび入りて傍なる。黄金の筥の
蓋うち開かれ。てんでにいまて撥探るに凡そ黄金の十包ばかり。其外にハ
物もあらねバ心に不足の思ひを生じて。玉垂を引よせつゝ耳の傍に口よ
せてなやあの外に黄金ハなきや。意あらばいはすべし。かたどりの金を把らん
として賊よなほ業をなさんとす我なれども。鈍かりきと舌うち鳴して呟くに。
玉垂ハこれをきゝて。およそ黄金の何ほどありや。夫君のるへ妾も知されバ
我も此へ入れしかども十包ばかりハ平生にありつるまゝ此餘は曾て貯への。

わるくとハいへどもその何方へ秘ゆくるゆるこにまくぞ少くもわを詮方なし。
甚知よわる限りをのして少しもちやく立退ばらん。徳よ限りなハあれ物
くるゝ間ぞして鄭ハまるゝ。両個一所よ憂目をこゝろんとう得女子の
そら怖しくて。見さゝ渠とハ離さまるゝ。胸東きて慄と。渾身震へ
し牛島が。後の方ゑ對居るゆゑ。舎人ハ心よ点既て。かゝて准備の胴巻
の。財嚢へ金弐ツ宛。包のまゝゑ仲ゝ。ゆくるゝ十色わり。ちくる
けまとゞも二人して。要時浮世弐嘗むべき。料ゑハこまゝゑて足ハ色し。
まゝ其上ゑハ詮方わゝんぞくゝ早く立さゝんと。固未しゝ弐くゑふゑ
を把て。子舎のうちへ立帰ゝろ。かゝて覚語の身ゝるれだや。草鞋脚半も
甲斐ゝ。玉垂も裾巻わげて。人目弐つゝむ袖頭巾。ゆて切戸をゆし

ゝ弐カまゝ。胃ゑハさのこゆゑ。必ハざりる雪さゝゑ。稍ゝゑ降はゝて。
向脛も越ゝたゞり。かゝてハあゝゝ夜の明ねまゝゑ。遠くハ走ゝるかゝゝん。
然ゑと些の猶豫もあゝりを。今さゝゝゑ詮方なし。心を責て走ゝゑ。
と舎人ハ先ゑゝ立ゝゝ。玉垂弐励ゝまゝゑぞ。情郎と諸共よ親の恩
義を後ゑて。黄金弐盗ゝたゝの家をさゝんと。更女ゑ似げなく不
敵ゑも。汁技ゝどの嗚呼の婬婦。舎人ゝるゝゝ水火の中をも。いとハ
しとまゝて乱ゝる。心の駒の綱よ索ゝゝ弐耕地の畝づゝひ。面ばけ
ゝ弐雪吹をも。袖よゝゝひゝ端ゝ。舎人が跡よ従ひて。何地もるゝ
立退けゝて。嗟ゝの玉垂私情を通ゝ。親弐辱しむのゝゝゝ斬大
枝ゝ。黄金を奪ふゝゝゑ人倫の所業よわゝゝぞいと憎ゝべゝさの

婬婦るまでも。伍平も慳貪、邪智ゆゑて。物の情を一点もなき。人
狂変詐貧者を讒て。貪らむ。淫るまの黄金。弄ゆへ其身ゆ着
べた。一夜の間ゆ喪ふも。まことに天の討らひるらん。世の人不義の
富ゆ羨ま。利欲ゆ走る義理を棄て。只管黄金を貪るるの
わり。一且その富をあたとくとも。終ゆへことなる佐倉沢の。伍平が
おとゝあるゆへ稀なり。されば近世の夷歌ゆ。何人ゆ詠しけん。外まり
いゆもえらまゆ要害ゆ。内まりゆる栗の刺衣ゆ。と況ん盗人の
守ゆ厳ゆ宝庫の要心。怠ら孫と。放蕩無頼の子のあゆ。多
くの黄金ゆ喪ゆるもかの刺衣栗の意ゆ。人と黄金を積ん
まり。徳をつまんるを欲ゆるべ。長く子孫の栄あるべし。爰ゆまこと不

憂のあるこを出来ゆけま。かの唐山の俗言ゆも。幸ひゆ並び到らば。禍ゆ
ゆ生ずとゆや。此国筑波の山中ゆ住て。その名ゆ筑波太郎と呼ばる
強盗の張本ゆり。近国を横行し。在〻所〻を徑廻て。豪富の家ゆ
ゆ入りて。資財雑具ゆ奪ひ去り。わるゆへ色ある処女を勾引し。遠ゆ
津へ身を活して。非道の黄金ゆ貪るるゆ。人〻ことを怖ゆて。
わるゆへ一郷ゆへ合し。若かの筑波ゆ強賊ども。押入ときゆへ撞を叩ゆ。指
子木をうち鳴し。そをを相図ゆ人〻ゆ集會べき約をして。然る
べた家〻まゆへ。ゆる拍子木と撞をうけゆた。その准備厳重なるべ賊ゆ
も是ゆの要心ゆ。怖ゆて。此ゆどゆの辺りゆへ寄も来ゆ。此穏ゆ
ゆ付ゆべ。治ゆ居て乱を忘ることゆ。あゆその人の忘ゆ。今ゆへ夫ゆの

要心之ゐる。況て此処やゝ家續るまゝ。てして要心もせざりる甚急り
をや。何ひけん。伍平ゞ家ハ近来の。分限るゞるもちの渋るゝ。傳ゆる紀
黄金家ゐるとゆるのうゝ筑波ゞ賊ども。伍平ゞ家ゝ豫てより。何ひ
居るるゝ。今宵ハ雪のふりもきて。人の往来も稀なるを。僥倖ありと
筑波太郎ハ。ゑ下十四五人驅催して。ちくゐる伍平ゞ傍へ来つまべ時を
丑三の比及るゝ。時分ハゆけまちゐゝ入ゆゝ。まゝ彼処より押いゝん
やと。彼方此方を窺ゝ所ゝ。何方も高塀鐵の。忍びゞ〳〵を表と
打くゝ。その表堅固の客体るまべ。まゝくちく押いらんゝ。容易ハるる
ひかゝ。賊ゆハるゝ〳〵乱を隕して。庭とおりを外ゝ程を考て低
めてうち入べ。術計をかるゆりこそゆゝと。傍の切戸雪風ゝ。微ゝと動き

けり。こゝ笑つけて一人の草賊。ちゝふ切戸のわりと抜ゝ。甚処捻ゝ
らゝて打入べゝとゝいひゝ。そのうるゝ紙うけて。押べやゝ開ゝ。賊ゆ
ハ得ゝ膽を潰ゝ。すゝ〳〵後方へ引をひゝ。この真夜中ゝ切戸口。
明てやべき所謂るゝ。彼吾〳〵ゞ押来ゝ紙。疾ゝ嘉して切戸を開ゝ。
此処より入らゝて勇ゝる。計策ゆやゆゝんぎゝん。人ゝ油断ゆゝまる
と。ゝ。企甘べ筑波太郎ハ。ゆゝて完ゝうち笑つ。汝ゝ〳〵心付ゝう。
かの陣門をゆひゝき。櫓で琴ゝ弾ぜゝとゝ。ゆゝ〳〵語ゝ紙ゝ。
如此いゝとゝ。ゝ〳〵ゝ。伍平ゝ。ゝ〳〵ゝ。計ゆるのゝ。
まゝと吾〳〵ゞ今宵来るゝを伺ゝて。ちゝべきゝ。ゝ〳〵ゝ。宵ゝ
まゝるゝ。ゝゝで。ゝ〳〵ゝ運善ゝて。雑ゝとゝ家ゝ打入て財ゝ

吉瑞あるを喜ぶものいひて人こゝの心をゐ挫きそとゝめて甚だく進ませ
り。筑波太郎ハ切戸を引うき。徐くとさこゝらるゝみぞ。草賊共ハ十
四五人。命よつ死つ立ちりて。ゐるゝみ此方の雨戸さへ。細目ゆあけて粲然
と。裡ある燈火をさて見てうり。理あるうるとハ爲よ玉垂舎人が忍
び安く。心周章て戸をさへも。湯ゝハちめどかたるうり。賊共ハ完
尓うち笑ひて。大吉利市と歓びゆいゆがて雨戸を密み明かの枕
火式目當ゆて。そまゝ人至つるくゐまべとハ一間ある雨室ゆてゝと
幽ある燈火の下よハ衣類調度るど。彼方此方よりちらゝーされど。
人一個も見えざまべ。賊共ハこゝみ計るあうゝ。影序ゐるゆゐ
まゞ誰ゝハ庫へ向け。誰ゝハ此処よ居てゆゆ妨ちるゆめゆゝべ。こゝる

一刀ハ砍捐よきと誰ゝハ衣類その外。奪ふべき物をちり集めよと。
いちくゝよ指揮ーて。安て准備の松明へ。ちくゝる燈を接ーて。みゝみ
のちて挙動ゆどよ。伍平ハこゝよ眼を覚ーて。要時考へ居くりしが。
甚声家内のゆゆゆゆゆ。忽地ようち発ゝさ。ちゆや盗人ゝりゝと。
矢庭よ反おき帯ゆあり。枕元ある燈式把て。遽しくうち射て。
ーーーゆ燭へ燈ちりこそゆまゝ。ちゆや土庫の辺ゝゆて。ぐちくと音ーけま
べ。伍平ハ長押よかけあをゝる。捧式外ーて小脇よ掻廷を。声ちり場
て家内の男女を。呼起ちゆゆぞ小奴共ハ。寝惚まあぐゝみおどろき
狼狽。帯よ犢鼻褌と羅ぐゝり。賊共ハ伍平が声をちゝべよ。擽
りゆけいゝて来まべ。伍平ハ見るゝり棒ゝりて。物をもいまべ打て

かゝるふ。賊等ハ呵〻とうち笑ひ。命あらばの老耄よ。妨るせそと
晃うをと。又の光と時るゝぬ。電光石火を搔くぐり。年こそ老こま
力量ハ。ゆ〻しく壮士ふ劣らんと。四角八面ようちゝろ〻ば。賊等ハ刀を
うちふり〻。或ハ青眼上段下段。太刀さゝ尖ふ挑きわゝ。かゝる処へ小奴
ら等ハ。ふゝふ捧鎌竹槍ゑんど。得物こを引さげて。曳声如してうち
強ぐ。をゝうゝふ扣へ〻草賊等。一ぬうふ接ぎゝ。先ふ進こ〻小奴
等ハ。で一刀ゝ砍例せば。残らものハこゝをこゝて。乳も魂も身ふ
そゝぬ。周章て逃んとする処を。追弧追詰わるを。僥倖一人も
餘さず砍伏せまゝ。體ハ積で累〻うゝこゝゝて了得心剛ある。
伍平ハ勇ゑを挫うまゝ。既ゝ這奴と爭ふも。黄金ハ奪ハせど

そうゝ。然ゝふ此ふ過わゝば。黄金ゝやハ換らゝべき。先ハ多勢
ゝ一個。ゝゝも對応ぎゝくもわゝぬ。ハ此ハ生まで争ゝん。恃を切
ゝる小奴等も。大かゝハ切ゝゝゝゝ。吾まづ此場を逃伸て。知縣へ
訴へ公家の。ふを假て讐ハ報ゝん。此如るゝ〻と思惟して。遠
を見わせ逃去んと。ゝゝべいゝ〻心臆して。足の踏所も乱るゝを。賊
等ハ追ゝと蹈迫〻。打太刀さぢを支へゝ。後へ巡後ハ尚つけ
いる。賊等ハ切先當ゝ〻。腕四五寸切裂まて。鮮血滾〻滴ふ
伍平いゝ〻後まゝ。傍の襖をふ紙〻き。逸足出〻〻厨
のうゝ。逃ゝ出せば此を仏よ。婢女等も怪まを慄き。逃呻ふを〻
斬ふも。甚処彼処ゆて引捕へ。或ハ腔をうち落〻。或ハ刀ゆさ〻

賊夫慮女房
愛らしく
雪夜より走る

貫死。瞬間ふ三四人ばかり枕ふ切倒すべ。まもなく吊る主の伍平。小奴婢女が死骸をみて。心頭りふ慌るを賊ども。ゆるゆる逃さじと。伍平が中よりり巻ゆぞ。今ハ逃るゝ為もなく。滴る血しぶきを拭ひ。打くる太刀をうけ止つ。ものべしハ挑こゝろけまど。完分ハ元より多勢なり。心ばかりハ早まとも。精神既よ労まゝれば。渾身自在ふ働くぞ。傍の柱を小掐ふり。嗟誰ぞある佐けよや。佐けてゆんと叫べども。伍平が住居の廣らるれば。隣まる家へハ稍遠く。殊よ深雪の降つゝし。真夜中なまべ誰わけて。聞付るものさらふなく家内のものハ残らず。賊ものゝめよ傷られ。即坐ふ死るものさへ多くて。主が情ふあるゝ。渾家と芍ハ彼処る。一間の内

ふ卧し居ゝ。渾家ハ霄より血暈の。ゝて起あて拉さへ。撞ものの怪ゝ孫。尚ゝり賊のかゝりて。泣叫ぶ声白刃の音。ゝよ把ばかりふ実ゆるものゝ。その怖ゝさも喻へんゝ。良人が身さへ気づへゝ。具ハ推き芍ゆも。怪ゝ為せとと我回ゝ。起めれば眩暈ゝて。ものを甚ゝ怒ゝ撞と搏ぶ。まゝ肘付つき腰辺ゝて。渾身火をのて焼ゝごとく。足龜あて。例ゝ仰ゝゆぞ。愁芍を揺起ゝて。おゝろきて過めゝんと。熟睡ゝを幸ひよ。これのゝ処の動静ゝ。ゝと。ものゝ聞ゝ足のゝ立ゝ。心ゝゝも肘をのゝ。脳まゝ對居ゝのゝ。彰も伍平が叫ぶゆぞ。依ゝて良人の身の上ゝ。嗟やといひゝ這回ハ。自ら心を励まゝて。起上あゝめ

ゐぐら。横さまうつと引わくるまでび。賊ども目をくくこまぶ足ろけ。爰
ゐゐ人の居よりとぴみより早く晃うと。又よ渾家の肩さ紀を。
五六寸切つけらまと。嗟といふ声諸共よ。撞と倒まて息絶る。此ものの
音よ目を覚せ。苟ハ床を衝と拔いで。母ぐ體ハ把つ紀く。喃
母うくめく。瘡の痛く覚ゑ。爺さ多何方ぞ姉うくよと寐惚れ
眼をこりゐぐら。ゆるを佶と筑波太郎。嗟眉面よき女の童。怪家
あさせそと抱よせ。霎時ぐゐどぞ辛抱せよと。いひつ緊と猿轡。
准備の縄のてゑ足を縛て。母を共障ぞび。四隣よ安て
妨をや生ぞ。不便ゐまどゐ主の老耄。息の根をあてをや退
らん。土庫ゐる衣服笞財ゆ。こや大かよ運び安ゐ。無益のゐゆ

時ゐ後ーそ。ぴくくとゐどぶ。心泊ざゆと主かゐ。賊ども伍平を
一刀よ。砍伏んとぞ先ゐ伍平ゆ。伍平ゆ今ハ神心つまを。逃れんとゐふ
そのゐゐく。終よとれゐゐ草賊ぐ。刀の清と消ーゐハ。怠まいゐゐ
業因ゆえん。日比吝嗇邪慳ゆて。貯へおきー金銀衣食ゆ。かくらん
后へ何ゐゐ甘ん。嗚呼ゐを懷て淵よ沈むと。将よ是ゆのゐゐべー。
賊ども人ものー歓會て裡の方より荷物を運び。まと彼芋茎縛め
ゐゐ。筑波太郎自ら抱きて。徐くとゐゐゐ。姉ゐハ僅草賊の。六七
人ゆ残ア居て。行李ゐ元どをゐり集め。何心ゐきその処へ豆音高く
いひ表ゐゆのゐ。賊ども已まぐ群ゆやと。ゐれび甚ゐ旋くとおぐく。
手ゐぐ九よ満ざゐ少手。いと逞まきき両刀帯ぢいくとゐゐ面魂

威風凛々たる健士なり。賊等ハ此こと成ずるとゝゐ。必ず五分の怖畏を生じて。ゐ元ゐのゐ行李ゝ引かげ。まさに出んとす。彼の少年ハ把てらゝめ。已等ハこの法を。排徊ゐ出る活盜ゐ。吾與ゝ行るゐふゐゐれど。ゐれゐ家門の老若男女を情ゐくゆ慶ゐ。資財を奪ふ無頼の癖ゆの。眼ゐかゐゐハ己等ぶ。運の極ること受活ゝて。縛め受ゐと雷ゐ。等と声をたゝるゐて。罵ゐゐゐゐゐゐ草賊等ハ。此の威勢ゐ辟易ゝて。敢てゐゐゐハ彼ゐゐゐゐゐゐ。哥ゐゐゐゐゐの先ゐゐゐの少年ゐ。ゐゐゐゐ随意ゐ俊巡ゝて。さゐゐ一ゐの回答ゆゐゐ。當下少年腰搖さぶりて。縄を去るゝゐ繰出ゝ。先ゐゐ賊を縛めんと。ゐゐゐ賊等ゆ一大事と。ゐゐゐゐゐ一勢ゐ。ゐちゐゐゐて

腰刀を。ゐちゐゐゐと抜ゐゐゐ。汝何等の奴ゐハゐゐ孫ど。吾くゐゐゐゆ脇めゐ。汝ぶ随意ゐ縛めゐゐゐゐゐゐ。速ゐゐゐゐゐ。命ゐゐゐゐハ佐けて遣させん。然ゐゐゐハ此家の白徒等と。俱ゐゐ冥土へ旅立せんと。ゐひはゐうちゐゐ白刃の光ゐ。少年ハ絆ゐゆ甚だ。嗟ゐゐゐゐゐゐゐゐ。ゐゐゐ越ゐゐ目等ゐゐゐ。吾ゐゐゐゐゐゐ汝等を。ゐぶ黄泉へ送ゐゆゐゐゐと。うち込ゐ太刀を右へゐゐゐ。左ゐゐゐ外ゐて身を捻り。要時ゐゐゐハ抜ゆめゐゐゐ。飛鳥のごゐゐゐ翔ゐゐゐ。賊等ハゐゐゐゐゐゐ逃さじと。切先揃へ中央へゐの少年ゐゐゐ竜て。後横ゐゐ切ゐゐゐを。支ゐゐゐゐゐゐ少年ゐ腰ゐゐ刀へゐゐゐかけて。抜ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ先ゐ進ゝ。両個ゐ首ハ宙ゐ飛ち。體ハ撞と後居ゐ倒ゐ。ゐゐゐゐて残ゐ賊等ハ周章。あゐ色めくて少手

がうちふる及び見ふごもの及んでも。立ち裳矢と法を斎さまで。ふ練の太刀風を及ん。賊等が及ぶべたるる孫の瞬間に切殺さまて。ご一人ぞ遺ちまる。かの少年は生殘つて。賊を矢庭に引きく縄りて。縛と傳へわげ。你等が及びの腕伊達して。殺計の多くこびふ掛まり。無頼ふがうもこまに成べ。性とのもの。報の車の輪にあく。ふ死を。不義の栄利を貪るあると。可つけく傍の柱に傳して。ゆて側にわる。松明をうち照らし。彼方此方を及まの廿べ。美を亂せーどくるる。この家の死人と旅人も。ふまく歎息ーうろ

第八回　蓬會太郎語往事

かて旅人の血刀を。傍の畳につたえる。松明をうりてし。この家の人の一個ども。餘さぞ賊のふかるまーう。若隠ぞわるまべ。誰四わまさくゆよ。これの渠等が群よわるべ。既に賊等成るまて五六人討ちる。殘まる一個を勇ーうり。怖まてぞさく出て来ると。呼ど回答もあるくふ。この家の人の殘るるく。こる殺されーう無斬やふ。とまくと歎息ーて甚処此処を。さ一調べるふ此方ある。小子舎の内に倒まる。女の肩さた傷らまと。と苦ーげふ蠢くわる。旅人の甚処へ走るまるて。声成ちるそこまに女よ。ゆ成定めてよく吟孫。ゆまべ僅の傷痕あるを。さのこふ頼らるやわ。吾いさてうも嗅ちまる。ゆあるれども賊等ふ肝悪。ゆるふ忍びぞ五六人。砂伏へるの人とが。恨こな成報ぞる所謂ろう。そまのこるべ一

個をば。生捕て彼処よりあり。こゝぞ正し処賊の証人渠を正し
て在家を去り。知縣所へ游る。ゆ善こそ肝要なれと。男女ハ
うるさくも。ものうく心を勇まし。尺肘着て起わぐる。少手ハ後
方へまわり。膂力をそゝ扶おこし。心低定るゆ持まうとしのゝて
自らをさし覗き。胸ゐをして前よ坐し。ゐをば足忘れのゆる。
ぢん身ハ正しく茨木の伯母れ前よ在さぶらや。然りゆ吾ハ弥藤吾
ゲ。務鴨太郎よいぞと。ゆて疱負ハ目低足ゐるうさ。一眼ゐるより
たらくと。落る泪袋袖のて拭ひ。ゐる息をゐと吻きて。鴨太
郎よてゐるる。彩浅ゐる為体を。ぢん身よ足ゐる恥ゐハしさと
ハりゆ妾も賊のるよ。死ぶぐかりし低僥倖よ。疱ハ浅くしく息

吹かし。面ゐゐる歓びしさ。見ゐ増るるゆゐゐん。まゞ何ゐりて語ら
ゐた。積る説話の数ゐハ。胸よゐども疱負の苦しさ。足ゆゐそ遺
恨ゐるまと。歯を切て泣伏ぶを。太郎ハぶちより抱き起し。がゐり
の浅疱ゐて。何条のるゐゆべき。心雄しくあしゆとゆゐゐゆ。
疱口低。在ゐゆ布ゐて緊と括し。懐のうち掻さぐりて。葉をゐゐ
さるぐゐよ。痛るゐどよ鄂ハ。乳力ゆ増ゐと。ゐゆけるば。太郎ハ蓬が
耳の傍へ口をゐ甘く言ぶゐる。僂るばぶや七年なゐ。某ハいと雅
ゐた須。ゐゐまゐゐせて少ゐしが。甚後箇様ゐゆて。武州金沢の学
校よゐゐた。顕時父子の恩を被て。かく人となるゐゆよ。如此
如此ゐる不慮の難よ。這回彼処を退ぶる。父上許へいぶるし処。

近くさ人の言ふやうは。兼ねていろぞや要用の事出来ぬと常陸
あり。高原とかゝんへ往きゝ。その後は絶て音信あり。定めて
彼処よ在ましらんと。やがて本意なく遠莫あるどそのうち告辺
いぬるそまさ人殺よ猜疑けまど。まづ高原へ出たさべ。倅の顛
末詳あゝんと。直さ及常陸伝志ゝ。未ごとに来ても按内をあら
ど。此ゝど所ゝを沈呻て。まづ高原へ測らまつきゝは。昨夜二更の
比ゆもありけん。然らふ霄より粲然と。ふりくる雪の稍よ埋ま
て。ゝづまの家も堅く閉ゝ。戸をうちゝたる茨木はつづれるやと
問かけくも。其処ごと教ゆるのさゝる。差方つゝて真夜中ごろ。
この家の傍ふゝち止まり。ゝまべ母屋の軒下は雪吹と凌ぐ

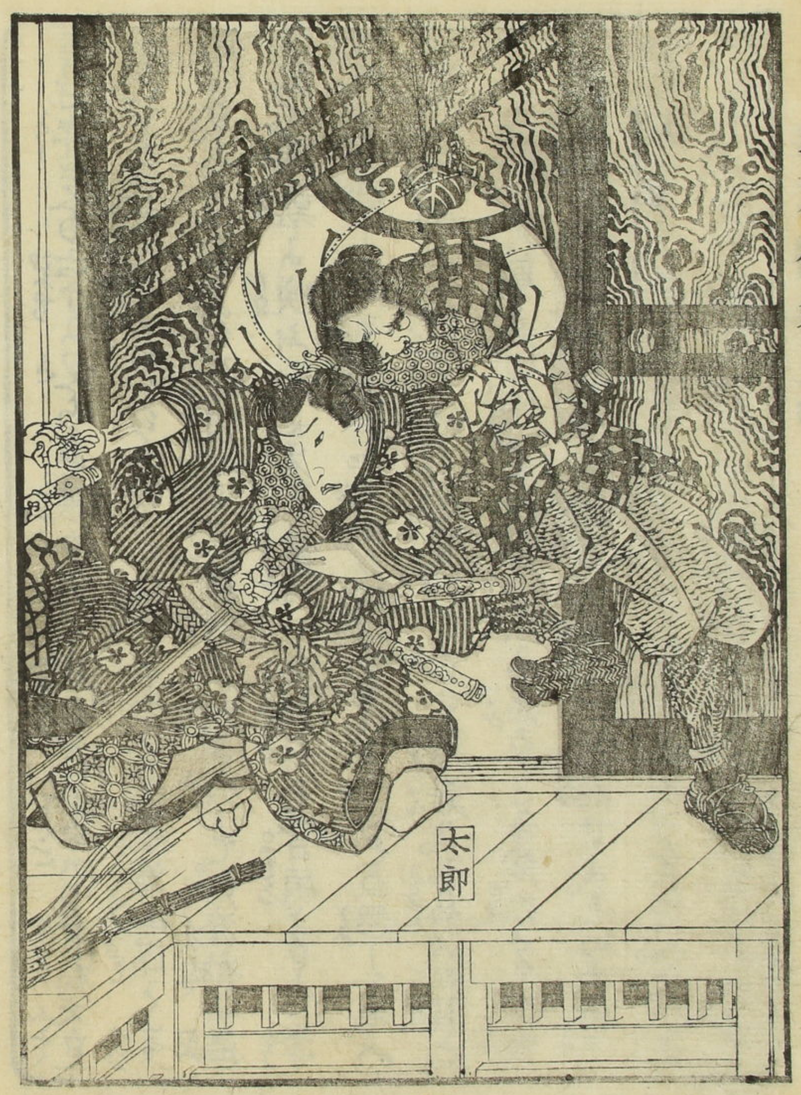
の便ふまゝ。まづ鬼も角も此処よ居て。夜の明るゝ後ふゝ。
在あの菓ゝと把り集めて。風を防ぐゝ居ゝるゝ。遠よ笑ゆる太
刀音と。叫ぶ声音は只事ゝ。こは此家ゝて争ふの業ゝ
のゝと良霎時。その動静を伺ひ居ゝる。奥まりゝる所と見
へて。表の方は賑とゆへど。甚後は太刀音人変も聞えぬは
ありゝれど。ゝの真夜中よ不測さよと。ゆをゝ甚処をゝち出く。
かゝるさゝるゝと家の四方を。遠ゝまゝまべ庭口と。ぬぶゝ
折戸の閉ゝて。ゝ。偽は先ゝよゝ。絶ぎは盗人の。入ぬ
ゝのやとゝのゝ。折戸ゝ。ゝ。ゝて。何べ按ゝ。ゝ。偽と
そゝへまて。ゝまべ。ゝは盗人等は裡口ゝ。ゝる所ゆ

て遣はる奴等ハ是ゆゑ見らぬ。草賊等ハ是ゆゑ見ぬ是ゆゑ。これぞ
詮義のるがくるるり。生捕ムとそふうち。渠等ハ却て某を。
害さんとすると止るるく。今いふごく五六人いるゆ懸つ一個ハ捕
はさこハ。什麼この家ハ茨木の住居ゆてあるる。父上のる心ゆと
あし。伯母ゆよ云ふ一まるとと。詞短うゆ急ゑ太郎を。伯母の蓬
へるるかるて。爺れのるゆハ此方より。飛脚をゑて金沢ゑる。ゆん
身が許へいひあるーが。鄙人の愚純ゑて云れぢといひて帰ゑく
べ。外ゑ一個の人を情ゑ。ちの十日ゆど以前とゆ。金沢へ遣ハ
せーが。依ハゆん身ゲ立退くる。ゆく書翰を届ーく。其くいまゞ帰
ら拵べ些の便宜もあるゞ。語るも泪の種るゞる。妾ゲ家の

茨木ハ養子鳥松ゲ放蕩ゆて。田畑ゑ下ゆ家藏まで人るゆゑさ
ーくるゆより。斯てハたるゞと足拘へ使をゑて兄公を招ゑ所の
るゞも潭ひーよかの鳥松ハその以前逐電ーて往方をゑるぞ。
何ゑるゆゆ此まくゆて。世ゑる便もあさのるる。僥倖ゆの
家の伍平ある人妻をゑだて後配といふゆ面るき支ゑるゲ。
所謂茶飲友どちゑ世ゑいふる形あさゆ。身の薄命ゑ詮
方るく。媒ゲいるゑ任ー。ゆくゑ弥藤吾ゆーゆ夫ゑるくんと。相潭極
て恥るーくゆ。五十代超てのの娘いるるゑ。齎ハかのゆ身ゲ妹等を連
て二度の緣ゑ。るゞ身ハ鬼ゆゆゆ。雅児ゑ歎難ゑ世ゑとそふるる。
そゑて代情ゑふ身を任ー。弥藤吾ゆーハそれゆるーく。妾ゲ

年来住荒せし。茨木の隠居家よ。足を止めるひゝ。夕き時
ろの忌いしきさるの重あり来るものゆや。癈人とまでもるりもひ
し。往昔の疱の再發して。悩そのべきるぐよ。痛いろみ抱せ
うども。定業あるよや。路の月下旬よあの家を去るひ。病ゆ人
その内ゆも。ちん身ゆ。ちろ〳〵一日ろとも。看病さけんといひろた。
ひまに固来捐くる身あり。死もともるどろ惜ろん。謙るべた二
品も。疾ろり渠よ與へおけば。今さろ心遺りるゝ亡後ハ志とゆ人
息わるゆど無用ろと。苗めらゝよ祈ろて心ろもうち
捐ろとゆろり太郎いうち驚た。ゆうぞ甚処へ合彼と伽し
声ゆふ泣入つ。且くわりて自式攫げ。老少不定といひるゝ

まど年さ人日六十よ足らぢ。果ゆひる残念さ。伯母ゆの看病不足
いるけまど。其傍よわるろゝ。もと経方ゆわりるを海山隔ゝ爰
ゆぞ。ちろざりゝど拘惜やと。天ゆ仰ぎ地よ伏して。紅涙袖よ溢
まろ。悲歎よ咽ぶわりさるゆ蓬いゝ涓をそ人日頃よりて孝
心のゝと深ゝとゆ平生さろ。兄公の語ひるさそる悲ゝゆ人
ゆまど。今さろよ経方るゝ。今宵この家の賊難よ。吾倚ハ無賀と
ろりれど。父尊夫の守ゆ。不測よ恙るさる式ゆるゆ怪
ゝた雅児の。苟い即ち身ゆ妹ゆり起して對面せよ。といゆ太
郎ゆ悲の。中よ聊歓びて。蓬ゆ指さゆ傍へゆき。ゆまゆ人るた話
ろさよ。上ある蒲団ゝかゝせば。薄び中ゝる拖のゝ裳ゆけゝ売や


太郎

強賊豪家ヘ乱入ーく
殺人を
蠱ふく
伍平
蓬

空蟬の。空しき床ゆそりけまべ。蓬も倶に鳴くまで。佞の妾ぐ乳絶せ。
其間に渠も迷ひ出て。賊のゆやかるまに。太郎に甚処も改めて
よと。いつに太郎も松明を。燈して。その家の隈く。尋ね巡れど
ど稚児の。死骸いまだ。こんもうまで。太郎の呆れて詞なく。さてば
何地へ往にけん。心周章て。これ損せ。とまと逸くに改むるぬ。よく
こんく祓べ。撞と坐し。斯薄命なる親同胞ぐ。世にまと在ともなれ
へぬと。ふを又きて。黙然なり。當下蓬も倶に呆れ。苦痛を忍び
這出して。ふるさも胸の裏きて。切倒さまし。男女の死骸。その誰と
定るの。ふとなるるの汐牧の祓ど。娘玉垂と牛鼻ぐ。死骸とおぐ
したのるけまべ。彩残すなく。殺さる。その中ゆて。彼も二人の女を

全ふせるやうこそるけまと。日頃よりて心汐ぐ。弱官なりとおひ
しぐ。此家へ紛さく入込て。素内代探ま同類ある。賊を引ま
るもあらむ。然て王垂かの漢士と。情を通ひ。却さちりぐ。
そまもあるこそ此難を。獨逃まてかの漢士に。伴ひゆまま
るめれ。然もあるむして。彼なるのこ。命扶うかぐとやべこま
なの荒増を。詞短うかるゆぞ。太郎ハ猜疑果て。夫なのゆハ
縛ばる。賊を正さべ分明あるんやでく。渠代鞠問て。その實
を吐せんとぱるくと。彼処へ至て。やよ草賊。性根をつけよ。抑汝ハ
ころ刀に。貫くべを。雲時がうまち命を汝にあづけ。さまへ。絆の
を笑んがうめなり。此家へ入る強盜の。張本といふ者わらん。名

なべ何とろ〻なぶ做せものぞ。まこと此家なる娘玉垂姫ぞと二人が
往方。うへ久く逗留せし。牛島とりいの浪人へ。定めて你等が群
あらん。夫等のるゑ逸くこと。言さべ命へ扶けてくまん。さらばの
見てより你が渾名。寸々に切割こと。骨へ砕けて醢ふあーてんぢと
白眼て。おそ〻し〻身ちち守るゆぞ。賊へ太郎がいつめーぢ。ゑ並ふ怖
て乳も魂も。ゑ酌ゑ酌わまで震ひ慄き。おそるく刀称に甚くこと怒り
のひそ。吾その實ゑ言さんこと。命扶けてるゑ称といつよ太郎へ冷
こらひ。你達こそ偽ま者ぞ。これ爭へ言を食ん在の随意さ
言〻とるゑ。何条你が命ゑ把らん。疾く言せと詰ま問ま。賊へ頭を
うち擡げて。ゑ〻揀梁と称るへ。筑波太郎と呼做せ人ゆく。

さの国筑波の山に住めり。折く里を徘徊して。豪家へ押入り金銀財宝。
奪ひとるの活業なり。さるべとの家へ音に吹く。守銭奴るまべへる
まで。ゆそ。かの牛島とりいへ。まこと。はるく兵へ。そこ此家なる雑
るゑ女児へ。揀梁自らゑ抱き。尚ある賊等と俱に帰ま。これく
呼に遺ま居て。雑具を集めるそのわるゑ。刀称の来りるひーぬ
て。とまへくちへ入せーゑよるゑ。姉娘をゆ中せべき。處女へ乳けゆべ
いべきるへ。ゑのと許〻のと託けまべ。太郎へ独点所て。それゑ
いさゑ相違へあとゑ。さべ扶けて沒さまべけれど。今要時礼明せ
よとへひすて此方へ来るく。伯母よりひて草賊が。言せ処へ如此こと
るり。某猜慮とるゑ。姉娘と牛島へ賊等が群に捕めるべ。かくて

蜜に心を通ハ。るを〜さしがたの強ぶを。僥倖をして走るを〜あるこん。親の大事なれ迹をよして。情郎と走るを言語に竭る婦るをべ。これ等よハ些も要る〜。不便よりのハ芍うり。強賊抱き去まりとしべ。稚るけれど女の児活代るさん巧ゆとそ。さをべ某縛し拉る。賊を按内に筑波へゆを。時刻をうつさど把戻さんと。勇をろ伝蓬へるぬ。和子よ早るハ無理あるる弟ど。按内をるるぬ山へゆを。賊等ぐゑ小屋る妹をるり。ひんるのハいと難るを。ひるに心ハ剛るりとも。多勢に無勢争る歇せん。その在家伝を安るハ。公へ訴へゆげ。国司の威光でるり戻さべ。輙るるんと諫るを。太郎ハ頭を左右ゆるり。伯母ハ前るるを按ードるハあ。渠等三面六臂ありとも。吾等こをるを覚へゆり。何条過のゆべきと。

伯母が諫めゆをるをんを。夜ハ白こと明るるまで。落る鳥の声さへも。凍て寒けを雪の朝きのるに換る。狠世界。田面の案山子稲塚も。こる白妙とるるるに。かるる処へ動せをと。いるる四辺の人こ等。その在さるに胆を消し。厨の庭に囲居て。ひさまる呆を置こと。割るもゆる怖さるに後巡をるるめもゆる。當下太郎ハ。ちの。こハちの海の人こるる。其るるハ内海太郎と。呼傚をるめゆくこの家の甥るり。昨夜ゆるくの。るゆるて。ひらて通りの為体。家内のるハ大かと死せり。伯母のを薄疵一箇所るるを。命に恙るーとのど。差体るるべ。賞束る。まるく此方へ来るるを。何くをの動静安るハ。ちるーて知縣る国司許へ新らく。ハ所の掟に。ちるーるとを中をゆど。中ゆの頭めをる雄子ハるを。筑摩を

眉をよせ。かゝる騒動合壁のことなく。努ゆめあらざりしハ。かくまでも越
度ありき。今表にて誰やらんが。昨夕佐合沢へ盗人いり即死の人のありけりと
噂る状哭のあるさに四辺にあらし来てことごとく家内残らず枕あぐべく嘖き
切ましまる何やしら此より状中もなやく知県へ訴へありして捉を討らるゝえ
と怖く吉ろを内海太郎いふらく所も左せり。去るころ伯母ある。蓬の浜賀
て命ハ全し。まづ速よ医師が家よせ介抱せさせなハあるべかりき甚ハ是より
して賊等が栖へさらに妹やきさ妹等を連わざえ然のみをハ足下等が
よ絶よ討らはなりねと渠等よ託し縛めおきたる草賊が。縄しき
わどきこれより汝按内して筑波が住家へ主を連わけ。吾そのうへに
詮方ありといふ賊をさきに立して徐くと歩をかずよ所の人と諦ふ

着き。太郎が袖をひくてりよせる貴客ハこの家の甥にして賊五六人ニ
討まりて。一人を捕へられしといへど。その賊をうえ引倶して何地へか越のよ。
まづさて当りて騒動の。悪人こその貴客ゑるよ往方もあらぬとし遣
てハことごとくが越度となり。殊よ迷惑いかひなり。まづ捜断のすむまでハ。
賊をもこゝよ縛めおき。貴客も止まりなとといふ。袖ふり切て眼を睜らせ太
郎ハ声をえりわけて。嗟苦しき愚人なる。察する処よ己が身をも賊の
族と見なしよら。正よ死伯母ハ彼処よあり。更て真偽をよく暁きよ。今你
たちのいふごとくこの捜断の捉よむまで浮くあるよ留まりなバ妹が身を
過ちまそん。かの山寨へ赴んで妹をつきとめて帰らんよさまで危きをよ
るとあやしてみずて立出つ。かの草賊をさきに立し。脊戸なる雪状踏ちる

して。筑波をさして急ぎゝる。里人等いろよう式。知縣へ訴へやけまべ。頻ゆ
検死の官人等。来りて死骸を点検し。まこと蓬ゞ言は多由式。逸さゆ書
らべ。太郎とゆんゞ帰りて来べ。速よまうし。知よ。且蓬ゞ疵傷の養生
汝等少しも急ぐると。弾嚴よ命じつ。官人等ハ帰らまろ。されば人ゝ
うちよりて。医師を招きて蓬ゞ傷疵の療養等家あるべしとゞ。
良人をもて人ゝの死をうれて心も挫けつ。その日の夕ぐまを果よりがく
まべ。その家の死骸どもをまくよりち納め。賊等ゞ尸も一ツの邑
て。寺院の傍へ埋みやりぬ。かくて太郎ハ草賊ゞ導ゆよりてゐを急げ
ど。山腹ハ殊さらゝ降つむ雪の深くして。膝を超ぬりの所もあり。尾
の上ゆ一の山風ゝ。颯と吹くゝる雪吹よハ。面をひくべ元ゆもく。息さへ

も吹ハ敢ずして。彼方此方と測るゆぶよ。心剛勇ゆりとゝど。昨
夜よりして食を絶且終夜寐もゆらで。雪よ凍へしゆのゆゝ。猪
得太郎も今ハもや。咯もゆりく歩みぐく。右見まべ遥よ一斬の。
酒屋と坐りき廓のゆまべ。足式をもて彼処よりちゆう。嗜
まぬ酒ゆも寒さを凌ぐハ。とまてよ増ゆるゆのやゆくんと三三杯
を傾けつ。残まる酒を賊よ飲ゝ。飯四五椀を食ひられべ。
力もな式元よ復て。心地まぶくまくあるゆゆりハ。いざとて其処を
ゝち出ぐ。その日盈の比及よハ。筑波の峯へ至まろり

桂石傳初輯巻之四　終